

「リフォームしたんやな！」～ツバメの巣作りから巣立ちを見守って～ 常磐会短期大学附属泉丘幼稚園（大阪府堺市）

< 5歳児 >

【はじめに】

園舎の一角にツバメが巣をつくった。昨年に続き2度目のツバメの飛来となる。今年度の年長組は、ツバメの巣は昨年より残っていること程度は認知していたが、昨年は年中組だったことや、巣作りが夏休み前に始まったことから、ツバメにはあまりかわることなく進級してきた。

【リフォームしたんやな！】

5月半ば、ツバメは昨年の巣に少し高さをつけたように巣を修正し、卵を産む準備をしているようだった。子ども達も園庭で遊んでいるとよくツバメが飛んできていたので、ツバメが巣を作っていることに気づくのも早かった。巣を見上げる子どもの姿も増え始めていた。5月後半、ツバメが産卵し常に1羽のツバメが巣に座っているようになった。教師は子ども達とツバメを見る時間を意図的にとるように保育の計画を立てた。

ある日ツバメを見ていると「巣の上の方だけ色違うな…リフォームしたんやな！」「だって、前からある巣やもん、古いもん！きれいにしたんや！」と最近人気のテレビ番組の言葉を活用した発言が聞かれた。確かに今年作り足した巣の部分はまだ湿り気があるようで、色が微妙に異なっていた。また「前のツバメさんまた来てくれたのかな？」という教師の投げかけに、ある子どもは「去年のお父さんと、お母さんかえってきたのかな？」「ちがう！子どもがお父さんとお母さんになって来たんや！」…と会話していた。この発言に教師も含めて疑問をもった。今年のツバメは昨年のツバメと同じツバメなのだろうか？昨年の子ツバメはどうなったのか？保育終了後、この話が職員間でも話題となった。

【ツバメって？】

翌日、E教諭がインターネットを活用しいくつかの答えを見つけてきた。ツバメは元来、もとの巣に戻るという習性はなく、また同じ‘つがい’でいることもほとんどない。毎年、新たな‘つがい’で巣作りをし、産卵・孵化・子育てを行うということだった。また、ツバメの子どもは、まだ天敵と戦うことのできる嘴になっておらず敵からの攻撃で命を落としてしまうことも多らしい。また、多くは海を渡る際に息絶えてしまうということだった。この話を子どもたちにも話した。子どもたちにとっては子ツバメがたくさん死んでしまう…ということにとっても心を動かされたようで、「がんばれ！大きくなってね！」と毎日巣を見上げる子どもも増えていった。

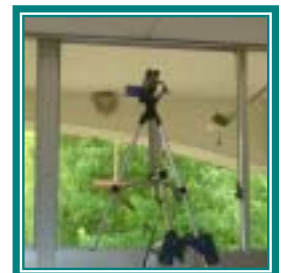


【ツバメどうしてるかな？ツバメがみえない！】

観察を続けていたが、昨年より巣の深さが深くなったこともあり、下から見上げる子ども達にとっては卵を温める親ツバメの尾がかろうじて見える程度だった。ツバメの様子がよく見えない状態で子どもの関心もみるみる薄れていった。このままではヒナがかえっても子どもたちは気づくことすらできない。そこで、軒下の巣と同じ高さにカメラを設置し、その映像をプロジェクターを通して大きな画面で観察できるようにした。この方法により巣を真横から見ることができ、今まで見たことのないツバメの様子が見られたり、ズーム等を利用して巣に近づくこともできる。

【ツバメさん、テレビにでるの?!】

早速大きな画面でツバメを見る機会をつくと「先生！赤ちゃん4羽いる！下から見たとき3羽しか見えなかったのにね…」とヒナの数を確認したり、「また来た！またお母さん帰って来た！」「今度はお父さんや！」「ちがう！お父さんは仕事やから、こんな時間には帰ってけーへん！」と自分の家庭での経験を話したり…「あっ！お父さんや！」「お父さん？」「だってさっきのよりほっぺたの“まる（赤い模様）”大きいもん！」と親ツバメの2羽の違いに気づいていた。また「お母さんがなんか



啜えてる。虫や！」「虫、動いてる」「わあ、丸のみや！噛まなあかんで」と餌は小さな虫であることを発見したり、約5分おきに親が餌をやりに来ていることがわかっていった。「あ～お尻こっち向けた！落ちる！」「きゃーうんこした！」「うんこ白かった！」とヒナが糞を外に向かってすることなど、次々に気づいていった。日頃下から見上げているだけでは気づきにくいことも、大画面で見ると細やかな動きや様子が目にとまりやすいようだった。何より、この新たな環境に子ども達は新たな刺激を受けたようで、その日以来、朝の身じたくが終わると「先生！ツバメ見に行ってくる！」と日課のように巣を見に行く子どもも増えてきた。また、ツバメの動きの様子がわかるところをビデオに録画し繰り返し見る機会ももっていった。



【さよなら ツバメ またきてね！】

子ツバメも大きくなり下からも見えるようになって数日後、「ツバメがおらん！」と血相を変えてM児が報告に来た。その声にたくさんの子どもが巣を確認に行った。「やっぱりおらん！」「どこいった？」「敵にやられたんかな？死んだんかな？」「もう飛んでいったんかな？」…「散歩かな？」「そんな訳ないやん」…「じゃ、どこいった？」…「南の国に行ったんやで！図鑑で見たもん！」「うそ！どの図鑑？」「お部屋にあるで！」…「ツバメさ～ん！」…と口々にツバメのことを話していた。

ツバメの成長は著しく、子どもとツバメのかかわりは3週間程だった。しかし、この3週間は子ども達、教職員、みんながツバメのことを思う期間となった。

ツバメが巣立ってからでもツバメに興味をもっていたM児は「また、ツバメくるかな…」と巣を見上げたり、園庭をツバメが飛び交うたびに「こっちにおいで、いいお家あるよ！」「テレビに映るで！」と声をかけていた。

【考察】

以前から見ていた園舎の空の巣に、ツバメがやってきた。巣作り、産卵、孵化、巣立ちとポイントをおさえて観察を継続できるよう、見方やポイントを教師は伝えていく。また機材を利用して、今まで見られない角度から見ることを可能にし、子どもの興味の継続につながった。

ツバメの様子を子どもと教師が共に見ながら、疑問をもち、話し合ったり、調べたりすることが増えた。子ども達にどのように見せるのがよいか、検討したり教職員全体で一つの環境に対し考えていくよい機会となった。

子ども達が普段見られない角度からツバメの映像を見ることで、ツバメの動き、様子に一つ一つ関心をもてた。年長児の感じ方(ツバメの様子に自己の生活経験を照らし合わせる姿、図鑑や情報による知識など)が表れた発言が見られる。年齢の違う子どもの反応との対比など子どもの育ちの過程を垣間見ることができた。

みどころ

保育者は、子どもの「リフォームしたんやな！」という気付きや言葉から、活動のきっかけや保育の手がかりとなる子どもたちの実態をつかんでいます。そして、保育者も子どもと一緒にツバメの巣に関心を向け、昨年と同じツバメなのかという疑問をもち、考えたり情報を収集したりしました。また、その情報を伝えるとともに、みんなでじっくりとツバメを観察できるように、ビデオを設置しました。通常は見えない視線や大きさで観察できるようにするという積極的な環境構成です。

こうした保育により、子どもたちは興味深く観察して、今まで見過ごしていたツバメの特長など気付いたことを伝え合ったりツバメへの思いを引き出したりすることに結びつき、子どもも保育者も感動体験を共有することができました。